二〇二四年度 置賜地区高校生
「地域と私たちの未来を考える」第七回小論文コンテスト

優秀小論文集

二〇二四テーマ
「人口減少社会の中でも持続可能な地域とするため、
地域の未来と私の生き方を考える」

はじめに

近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も確実に人口が減少しています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、地域の安全・安心や伝統・文化の維持存続が益々懸念されます。そして、このような人口減少の要因の一つに、高校生の進学・就職で県外に出て、戻ってくる人が少ない「若年層流出」があげられています。こうした状況下において、二年後に進学・就職を迎える高校二年生が、地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路を選ぶにしても非常に大事なことです。

以上のような趣旨から、「置賜地区高校生『地域と私たちの未来を考える』第七回小論文コンテスト」を、高校二年生を対象に実施いたしました。テーマは「人口減少社会の中でも持続可能な地域とするため、地域の未来と私の生き方を考える」です。四校から総数九十七点の応募があり、喜んでおります。応募された生徒の皆さんとご指導いただいた先生方に心から御礼申し上げます。

小論文を読みますと、資料編を活用しあるいは探究学習や自分の体験、知見を基にして、この地域の未来のあり方を様々な視点から提案し、また自分の生き方を模索しており、趣旨に沿った小論文をまとめてくれました。応募者にとっては、この小論文に取り組んだ経験が将来必ずどこかで役立つものと確信しています。

この小冊子は、一つの小論文を七名の委員により審査を行った結果優れた小論文とされた、最優秀賞一点、優秀賞四点、入選六点を収録したものです。高校生や地域の方々に広くお読みいただき、地域の未来を共に考えていきたいと思います。

令和六年十月十八日

第七回高校生小論文コンテスト実行委員会

目　次

はじめに……1
◇最優秀賞
山形県立小国高等学校　二年　染谷　柚乃……3
◇優　秀　賞
学園都市推進協議会会長賞
山形県立小国高等学校　二年　井手　吾南……4
米沢商工会議所会頭賞
山形県立小国高等学校　二年　佐々木　莉珠……6
長井商工会議所会頭賞
米沢中央高等学校　二年　髙橋　都……7
米沢信用金庫理事長賞
米沢中央高等学校　二年　星　知里……9
◇入　選
米沢中央高等学校　二年　鈴木　玲佳……10
米沢中央高等学校　二年　八巻　涼雅……12
米沢中央高等学校　二年　吉田　悠香……13
山形県立長井高等学校　二年　竹屋　水葵……15
米沢中央高等学校　二年　奥田　美佳……16
米沢中央高等学校　二年　小島　未裕……18
審査講評……20
応募要項……21
資料編……23

最優秀賞

未来をつくる

山形県立小国高等学校　二年
染谷柚乃

今年の夏、「星がこんなに近くにある。きれいだなぁ。」と、芝生に寝転がって見る満天の星空に息をのんだ。

去年の夏、大人も子供も誰もが楽しんでいる小国町に一目惚れし、小国高校への留学を決めた。実際、道行く人との挨拶や熊まつり運営など、体験や対話からの学びは深く、想像以上の幸せな日々だ。その一方で、小国町から離れて生活したいと考える人が一定数いることも知った。資料の推計人口によると、三十年後の小国町の人口は、現在の半分以下になっている。自治体消滅の危機に直面している小国町にとって、また、小国高校生・留学生である私にとっても、この問題は重い。

私は、小国高校で開催された全国高等学校小規模校サミットの、コアメンバーに立候補した。私は初め、他校生とともに地域課題について考えることが、サミットの肝だと捉えていた。しかし、それ以前に、生徒同士の交流が無ければ、一緒に課題を考えることすらできない。交流こそが問題解決の基盤なのではないかと思うようになった。熊まつりもそうだった。交流があって初めて友情や繋がりが生まれ、同じ課題に向き合える。地域課題は、一人で解決できるようなものではない。だからこそ、仲間を知って思いやり、そこから生まれた温かな繋がりを大事にして、ともに考えることが大切だと思った。

その後、山形県北方領土青少年等視察事業に参加した。国後島元島民の、今もなお故郷に戻れない寂しさや虚しさを聴き、胸が潰れるような気持ちになった。故郷とは本来、誰もがいつでも帰れる重要な場所のはずだ。小国町を守りたいと強く思った。

私は、これからやりたいことが二つある。一つ目は、地域に自ら積極的に出ていくことだ。地域サロンや農

作業の手伝いを通して、長く生活したからこそ育まれた文化や知恵を知ることや、私自身のことについてじっくりと深く耳を傾けてもらえることの喜びを知った。今までは、誰かに誘われて行くことが多かったが、これからは自分から声をかけて行動していきたい。

二つ目は、星空を題材にしたイベントを企画することだ。イベント作りという発想は、今までの私にはなかった。しかし、小国町の星空をはじめとする素晴らしい魅力を、地元の人や他地域の方々と一緒に味わう交流の場を作りたいと思うようになった。理由は、交流の大切さに気がついたからだ。交流を通して、「小国町好きだなぁ」とみんなで思えること、これが故郷を残す第一歩になる。とりわけ、ＳＮＳでは情報収集がしにくい小さな子供や高齢の方にとって、直接体験できるイベントは大切な機会だと考えている。

今日もきれいな星が瞬いている。まるで私を応援してくれているかのようだ。私もあの星のように小国町で輝いていきたい。

優秀賞

学園都市推進協議会会長賞

小国町で見つめ直す、私と地域の未来

山形県立小国高等学校　二年
井手吾南（いであなん）

山形県立小国高等学校。この学校は全国から多くの留学生が集まり、学年の三割が他府県からの生徒である。私もその一人だ。「地域みらい留学」という制度を利用し、東京から一年間の留学に来ている。東京では選択肢が多く便利さはあるが、人ごみの多さに時々息苦しさを感じることがあった。東京と比べ、小国町はどこに行くにも時間がかかるが、その不便さこそが豊かな自然環境を守っている。雄大な山々に囲まれ、透き通った川で遊ぶ体験はかけがえのないものだ。

現在、多くの学校で海外留学制度が導入されている

一方で、国内留学を推奨する学校は少ない。私は、卒業後の進路に大きな影響を与える中学や高校のうちに自分の住む地域だけでなく、国内の他地域についても深く知るべきだと考える。机上の勉強だけではなく、実際に他地域の人々と生活を共にすることでしか得られない貴重な学びが必ずある。また様々な地域から集まった友人との交流は非常に刺激的で、大きな影響を与えてくれる。

先日行われた「小規模校サミット」に、私は運営メンバーとして参加した。仲間と議論を重ね、地元で多く生産されているブナの木で箸を制作したり、地元食材を使った郷土料理を提供したりするというおもてなしを通じて、小国町の魅力を伝える試みを行った。地域の方々が積極的に協力してくださり、小国町への強い愛情を改めて知ることができた。当日、参加者が喜ぶ姿を見て、これまでにない達成感を味わうと同時に、この町を好きになり始めた自分に気づいた。地域の行事が多く、留学生も気軽に参加でき、世代を超えた繋がりが生まれているのもこの町の魅力の一つだ。また、経験は普段意識していなかった東京の良さや課題にも気づかされ、この学びは将来の進路選択において大きな糧となると今、強く感じている。

私は、人口減少が進む社会において持続可能な地域を創るために、国内の中高生を対象とした留学プログラムを拡大する一助となりたい。学校間の交流を促進し、各地で学べる環境が整えば、地方に目を向ける学生、ひいては未来を支える人材が増えるだろう。更に高齢者から伝統や歴史を学ぶ機会が増え、地域の活力向上も期待できる。こうした経験は自分の住む地域の魅力や課題を再発見し、広い視野を養うことができると考える。人口減少が進むにつれ、若者が集まる「学校」は地域の中で非常に重要な存在となる。小国高校は地域に根差した活動を行っており、地域社会を支える中心的な役割を果たしている。小国での生活を通じて、地域の未来を考えると同時に、自分の生き方を見つめ直す機会を得た。残された留学期間で小国町をさらに深く知り新しい挑戦を続けることで、持続可能な地域づくりに貢献できる生き方を探っていきたいと思う。

米沢商工会議所会頭賞

私が町にできること

山形県立小国高等学校　二年
佐々木　莉珠

資料によると、私が住んでいる小国町の人口減少率は最も深刻で、二〇五〇年には現在の約四六％の人口になります。将来、私が県外に就職して小国町を離れることは、町の人口減少に繋がり、小国町や山形県にとって良くないことなのかもしれません。しかし、私は、県外で頑張りたいと思う気持ちも強く、小国町の人口減少問題は、私には解決できない難しい問題だと思っていました。

小国高校では、二年生の総合的な探究の時間に、地域課題の解決策を考えるマイプロジェクトがあります。そのマイプロで、私は、自分の地域のために何ができるのか考えました。最初は全く想像もつかない中、自分が興味を持っているメイクと小国町の豊かな自然や畑と掛け合わせられないか考えはじめました。私は、道の駅でアルバイトをした経験から、小国町のお土産として、野菜やお菓子はあるものの、美容系のお土産は一つもないのはなぜだろうと思っていました。そんな時、昔見た映画やドラマなどできゅうりパックをしているシーンを思い出し、野菜からリップを作れないかと思いました。リップを塗ると一気に華やかさが増し、顔の印象が変わります。それほど影響力のあるメイク道具を、小国町の野菜を使って私が作ればいいのではないか。調べてみると、自分でも簡単に作れそうだということもわかり、挑戦心が湧きました。今後、ウェブサイトを参考にして試作品を作って使用感を調査し、何度も作り直してよりよいものに仕上げます。最終的には、商品化するのが今の目標です。

それを道の駅で販売することはもちろんですが、それに加えて、より多くの人に知ってもらうためＳＮＳも活用していく予定です。私は、母や妹と一緒にカフェ巡りをすることが好きで、インスタグラムに何度も投

稿しています。「行きたい」・「行ってきたよ」と言われると、私が選んだものや私自身のセンスを褒めてもらえたようで、とても嬉しくなります。同時に、ＳＮＳがどれだけ周りの人の行動を変えるのか、その影響力の大きさも実感しました。だから、リップのＰＲのために、ＳＮＳを活用することを考えています。そう考えていた時、ふと気がつきました。将来、私が県外の就職先から帰省した時、お祭りや花火大会などに参加して、その魅力をＳＮＳに投稿することで、小国町を離れていてもＰＲが出来る、と。私の投稿を見た人が行動を起こし、それをきっかけに小国町に住みたいと思ってもらえたら、県外在住であったとしても、小国町の人口減少を食い止めることに貢献することができます。

　このことに気づいてから、私は、大好きな小国町と私自身に、ますます誇りを持てるようになりました。そして、来年は、自信を持って進路選択ができそうです。まずはリップ作りを一生懸命頑張りたいです。

長井商工会議所会頭賞

若年層の人口減少について

米沢中央高等学校　二年
髙橋（たかはし）　都（みやこ）

　私たちの住む置賜地域では、人口減少が激しく、将来も減少していく推計が資料一で示されている。資料一を見ると、山形県全体よりも置賜地域の方が、人口の変化が激しいことを読み取ることができる。私が住んでいる川西町では、人口変化が四十八・八パーセントと、置賜内で二番目に激しい。どうしたらこの問題を解決することができるだろうか。

　資料二を見ると、人口が減る原因は転入者よりも転出者が多いことだと読み取ることができる。特に若年層の転出超過は、山形県全体の約七十九パーセント、置賜全体の七十二パーセントと、とても多い。この若年層の転出を減らし、転入を増やさなければ、山形県

の人口減少は進んでいくだけだ。では、なぜ若年層がこんなにも転出してしまうのだろうか。

資料三を見ると、高校卒業者の県外への進学、就職が主な原因であることがわかる。特に、大学進学者数のうち県外へ出ていった割合が約七十四パーセント（令和四年）である。大学進学で県外に出ていく人を減らす方法として、県内の大学をより充実させることが考えられる。しかしこれ以上、大学を増やすことは、経営していくことが難しくなってしまう。そのため、県外へ大学進学していった人が県内に帰ってくる、Uターンを増やすことが重要である。

Uターンを増やすためには、若年層に「山形県で就職したい、暮らしたい」と思ってもらうことが必要だ。山形県で行われた『若者の県内定着・回帰の促進に向けた県外進学者の県内企業への就職に係る実態調査』では、Uターンを希望しない理由として「志望する業種・職種がない」という記載が、圧倒的に多い。しかし、山形県には多くの企業があり、特に置賜では、中小企業が多い。それらの魅力を伝えていくことが必要である。私も、置賜にこんなにも様々な中小企業があると、中学まで知らなかった。また、まだまだ知らない部分もたくさんあると思う。それらを伝えていくためには、情報社会である現在、情報を発信していくことが必要である。置賜の魅力を若年層が見通すようなサイト・アプリに発信すれば、「置賜、こんな職場があるんだ」と気づき、戻ってくる若年層が増えると、予想している。Uターンが増えればおのずと、山形県の人口が増え、持続可能な社会となるだろう。

私の将来の夢は小学校教師だ。第一志望の大学は県外にある。そのため、私はその県で教員採用試験を受けるつもりだった。しかし、この小論文を書いていくうちに、山形県で教員採用試験を受け、地元の子供達に地元の魅力を伝えられる教師になりたいと思った。それは、私が山形でしかできないことだからである。持続可能な地域を作っていくために、私自身が行動していく。

米沢信用金庫理事長賞

地元の未来を創造する

米沢中央高等学校　二年
星（ほし）　知（ち）里（さと）

私の地元である米沢では、近年子供の数が減少している。それに伴い、米沢市ではいくつかの学校が統合される予定である。私を成長させてくれた学び舎も数年後には無くなってしまうのだ。このような現実を受け止め、これ以上若い世代の人口を減らさないためにはどうすればよいのだろうか。

現在、私は様々な大学の情報収集を行う中で、県内の大学では選択肢が限られてしまうことを実感している。資料二・三からも分かる通り、特に若年層の転出超過が多いが、進学や就職を希望する若者のことを考えると県外流出を抑制することは難しい。Uターンに関しては、県で既に奨学金返還支援としてUターン促進枠を設けるなどの政策を行っているため、Iターンを重視するべきだと考える。

資料に掲載されている「平成二十七年度厚生労働白書」に記されているように、都市住民の約四割が地方への移住意向を持っている。また、家族の変化や子育てを理由に地方への移住を考える人が多い。このことから、都市住民の中でも、結婚や出産を機に移住を考えている若者をIターンの対象にすべきだ。

では、人々をこの山形に呼び込むためにはどうすればよいのだろうか。まず必要な事はインフラの整備だろう。地方は都市部ほど交通の便が良くないため、マイカーを持つ必要がある地域が多い。そのため、バスの運行数を増加させたり、バス停の数と範囲を広げたりすることで、車無しでも生活できる場所にすることが効果的である。また、子育てをする上で近くに遊べる施設があることは必要不可欠だ。しかし、私達子どもからみても地元には子どもが楽しめる施設は少ない。そこで、山形の魅力の一つである自然を存分に活かした大規模なネイチャーパークなどの建設を行え

ば、子供の健康増進にも繋がり、豊かな自然の中で子育てがしたいという人々も惹きつけることができるだろう。

そして、私は地方自治体が「移住プラン」を作成することで、より移住しやすくなると考える。もし移住したいと思ったとしても、住む場所や仕事を一から探し、それからその地域に馴染むことは難しい。そこで、自治体が移住者と地域との橋渡し的な存在となることで、安心して移住できるようになるだろう。移住プランでは、雇用支援や金銭的支援に加え、要望に沿った住居をこちらから提案する。特に住居は、少子高齢化の影響でさらに増加していくと考えられる空き家を改装することで、住居をより安く提供することができ、同時に空き家問題の解消にも繋がると考える。

このように、都市部からのＩターンを増加させるために、子育てのための環境整備や、移住者に寄り添った支援を充実させていく必要があると考える。また、次の世代を担う私達が、一番に地元の魅力を理解し、ＳＮＳを利用して積極的に情報発信していきたい。

入選

持続可能な地域をつくるために

米沢中央高等学校　二年
鈴木（すずき）　怜佳（れいか）

現在、日本各地で人口減少が深刻な問題となっており、特に地方ではその影響が顕著である。そして、山形県の置賜地域全体でも、若年層の県外転出が続いており、地域の活力が低下している。特に、若年が学業や就職を理由に都市部へ流出し、そのまま帰郷せずに都市生活を続けるケースが増えている。結果として、地域の高齢化が進行し、地元の伝統文化やコミュニティ活動の維持が困難になっているのが現状である。このような中で、地域を持続するためには何が必要なのだろうか。

私の住む川西町もまた、若年の定着が難しく、高齢化が進んでいる。若年層の流出は、地域経済の縮小を

招いてしまうだけでなく、将来的な地域の持続可能性を脅かしている。特に、地元企業の後継者不足や、若者による新たな事業の創出が困難になるなど、地域の将来を見据えた課題は多くある。この状況を改善するためには、地域資源を活用し、地域外からの関心を引き、若者が戻りたくなるような魅力を再発見・再発信することが求められる。そこで解決策として考えられるのが「エコツーリズム」の導入である。

エコツーリズムとは、自然環境や文化遺産を活用した観光の形態であり、地域資源を守りながら観光客を呼び込むことができる。宮崎県綾町では、エコツーリズムを通じて地域の活性化に成功している。綾町では、自然環境を活かし、有機農業や森林セラピーなどの体験型観光の提供により訪問者との交流を深めてきた。これにより、観光資源としての価値を高めるだけでなく、地域経済の活性化にも寄与している。また、この取り組みは新たな雇用を増やし、若者の定着を促進する効果も見られる。

川西町でも同様の取り組みが可能である。豊かな自然と農業を生かし、地域ならではの体験を提供することで、地域外からの関心を集めることができる。また、地域住民がガイド役となり訪問者と交流することで、高齢者の社会参加の促進も期待できる。これにより、地域全体の活力を高めることができると考えられる。また、若者にとっても、自分たちの住む地域で新たな価値を生み出せる魅力的な場となるだろう。

このように、人口減少の中で持続可能な地域を築くためには、地域資源を活用した新たな取り組みが必要である。エコツーリズムの導入は、地域の魅力を再発見・再発信し、新たな価値を創造する一つの方法である。そして、このような取り組みを成功させるためには、地域全体の協力と、私たち一人ひとりが地域の未来に対して責任を持つ姿勢が不可欠だ。私は、季節ごとに感じられる、色鮮やかなダリア、気分が安らぐ風景、落ち着いた町の雰囲気を持つ川西町が大好きだ。そして、その魅力を再発見し、未来へと繋げていく役割を果たしたいと強く考えている。

置賜の未来を考える

米沢中央高等学校　二年
八巻（やまき）　涼雅（りょうが）

山形県置賜地域は、豊かな自然と歴史的な文化が魅力の地域である。しかし近年、若年層の流出が深刻な問題になっている。地方から都市部への人口移動は全国的な傾向だが、特に置賜地域では、地元に残る若者が少なくなっていることが地域の未来への不安要素となっている。この問題をどう解決し、地域と私たちの未来をどのように明るくできるか、考えたい。

まず、若年層の流出の背景には、就職や教育の機会が都市部に集中していることがある。地元に魅力的な職業や進学先が少ないため、多くの若者が都会へと移り住んでしまう。この流れを逆転させるためには、地域の産業振興や教育環境の整備が不可欠だ。例えば、地元企業と連携したインターンシップや、地域の特産品を活かした新しい産業の創出など、地元でのキャリア形成を支援する取り組みが求められる。さらに、リモートワークの普及を活用し、都市部に依存しない働き方を提案することも若者を地域に引きつける有効な手段となり得る。

また、若者が置賜地域に定着するためには生活環境の改善も重要である。特に、子育て支援や医療サービスの充実は、若い世代が安心して暮らせる環境を整えるために欠かせない。行政と地域住民が一体となり、持続可能な社会を目指したまちづくりを進めることが求められる。

地域の魅力を高める取り組みも必要だ。置賜地域は、歴史や文化、自然環境に恵まれているが、これらを生かした観光や移住促進の施策がもっと発展する余地がある。地域の魅力を発信することで、観光客だけでなく、移住を希望する人々にも関心を持ってもらい、地域の人口増加を図ることができるだろう。地域資源を活かしたイベントやフェスティバルの開催、またはＳＮＳを通じた広告による活動なども効果的である。

さらに、若年層が地域に戻りたいと思うような魅力

的な故郷を作るには、地域社会全体の意識改革が必要だ。地域の課題を解決するために、若者が主体的に参加できる場を設けることが求められる。例えば、地域の未来を考えるワークショップや、地元の課題解決に取り組むプロジェクトに参加することで、若者たちが自分達の手で地域を良くしていくという意識を持つことができる。

結論として、若年層の流出を防ぎ、置賜地域を活性化するためには、産業振興、教育、生活環境の整備、そして地域の魅力を高める取り組みが必要である。また、地域社会全体が若者の参加を促進し、未来を共に築く姿勢を持つことが重要だ。地域と私たちの未来を考える上で、置賜地域が持つ潜在能力を引き出し、次世代に誇れる地域を作るために、私たち一人ひとりが何ができるのかを真剣に考える時が来ている。

活気ある米沢市にするために

米沢中央高等学校　二年
吉田悠香（よしだ ゆうか）

米沢市は、美しい自然や歴史ある街並みが魅力だが、近年、人口減少という課題に直面している。少子高齢化や若い世代の都市への流出など、様々な要因が重なっているためである。資料一では、二〇二〇年から二〇五〇年の間で人口が増加する傾向にある市・町がひとつもなく、米沢市の人口も著しく変化していることがわかる。では、どうすれば米沢市の人口減少を防ぐことができるのだろうか。

この問題に対処するため、米沢市ではＩターンを促進する様々な取り組みを行っている。例えば、家賃補助金で新生活の負担を軽くしたり、事業を始めたい方のために補助金も用意されたりしている。

しかし、これは東京二十三区、埼玉、千葉や神奈川県の移住の希望者が対象となっている。私は、移住者

の幅を広げるために、外国人への対象も行うべきだと思う。外国人移住者を増やしたい理由は三つある。

一つ目は、働き手不足の解消につながるためである。日本は少子高齢化が進み、労働力不足が深刻な問題となっている。外国人労働者は、この不足を補う重要な役割を果たすことが期待されると考える。

二つ目は、地域経済の活性化につながるためである。外国人移住者は、消費を通じて地域経済を活性化させたり、新しい視点や文化をもたらし、地域に新たなビジネスチャンスを生み出したりする可能性があると考える。

三つ目は、多文化共生社会の実現につながるためである。外国人を受け入れることで、多様な文化が共存する社会を実現し、米沢市の国際的な魅力を高めることができると考える。実際に外国人のＩターンの移住に成功している都道府県がいくつかある。例えば、熊本県だ。熊本県では、農業や自然環境を活かした移住促進が行われており、特に環境に関心のある外国人に人気がある。

一方で、外国人を増やすことには、課題も多くある。例えば、受け入れ体制の整備や地域住民との共存への問題だ。

これらの課題を解決しながら、外国人移住者を増やすことで、米沢市がより活気あふれるものになることを期待したい。

人口減少は、地域社会の衰退を招きかねない深刻な問題となっている。しかし同時に、地域を再興するためのチャンスであると考える。市民一人ひとりが米沢市への愛着を持ち、積極的に活動に参加すること、よさをアピールすることで、米沢市を活気づけ、よりよい未来を築くことができるはずだ。

持続可能なまちづくりとは

山形県立長井高等学校　二年
竹屋水葵

現在、私の住む長井市では人口減少が進んでいる。資料によると、平成二十七年四月末時点ではすでに人口が三万人を切っており、その後も月単位でどんどん減少が進んでいる。この減少の流れをくい止め、持続可能なまちを創るにはどうしたら良いのだろうか。

そのためには、働き手の若者のUターンを促進させ、地元で働いてもらうことが大切だと考える。

私は高校の授業で、人口減少を食い止め、地域を活性化させることをテーマに探究活動をしている。活動をするにあたって日本の人口に関する調査を進めると、消滅可能性都市という言葉に出会った。少し前からテレビのニュース番組で聞くようになった話題だが、詳しい内容はあまり知らなかった。それは、若年女性の人口が二〇一〇年から四十年の間に五十％以上減少する可能性の高い自治体が指定され、長井市も新たに加入したことが分かった。そこで私は、消滅可能性都市から脱却することで、持続可能なまちになるのではないかと仮説を立て、調査のため市役所を訪問した。市役所の総合政策課の方々にお話を聞くと、市の外から新たな移住者を探し人口を増やすのではなく、市で育った若者のUターンに力を入れていることが分かった。そのために子育てがしやすいまちづくりをしているそうだ。例えば、図書館と子供の遊び場が一体となった「くるんと」の設立。その他にも「子育て応援パスポート」や「子育て支援医療制度」など数多くの政策を行っている。

では、子育て支援が充実してきているにも関わらず、なぜ人口は減り続けているのか。そこで、私達のグループは、これからの未来を担っていく同じ長井高校の二年生に、Uターンについての意識を調査するためにアンケートを実施した。その結果、現時点で希望する職業がある人、主に医療・教育系を目指している生徒はUターンをしたいと考えており、したくないと

回答した生徒は就きたい職種が決定していない人が多かった。この結果から、長井市内での働く場を増やし、多様な職種が選べるようになればUターンをする若者は増加すると考えたが、企業の誘致はなかなか難しい。

全国的に人口が減少している今、長井市だけが急激に人口を増やすことはとても難しい。進学などで一度市外や県外へ出て行ったとしても、「戻って働きたい」と思えるようなまちが持続可能なまちだと言えるだろう。少しでも長井市の良さを発信できるように、市のボランティアや交流活動に積極的に参加していきたい。

地域振興のために

米沢中央高等学校　二年
奥田美佳

私が住む南陽市では人口減少が続いている。資料一を見ると、二〇五〇年には現在の六割程になってしまうことが分かる。人口減少の大きな要因の一つは、県外への転出超過だ。資料二から読み取れるように、特に若年層が進学のために県外転出をしている。しかし、県内の大学の数を考えると仕方の無いことだと言える。そこで、UIターンを促進させることが大切だと私は考える。

UIターンを促進させるための具体的な方策として空き家の活用に注目したい。日本では空き家問題が深刻化している。南陽市も例外ではなく、実際に人口減少に伴い、空き家の数が急増し問題となっている。また、南陽市には熊野大社や白竜湖など、たくさんの魅力があるが、宿泊施設は赤湯に集中しており、時間や

費用のロスに繋がり、観光客が訪れるのをためらう原因になると考えた。この二つの問題を解決するために、空き家の旅館的活用が良いと感じた。新たに建設するよりもコストを抑えられる、地域独自の文化や特色を体験できる宿泊施設が増えることで、観光客にとって魅力的な選択肢が増える、などのメリットがある。

また、空き家の活用を進めていくためには、補助金の充実も不可欠だと考える。近年、子供を自然豊かなところで育てたい、戸建てで子育てしたいという人が増えてきている。しかし、移住や戸建てを買うとなると費用が掛かってしまい、足踏み状態の人が多い。そこで、空き家リフォームの際や何年以上住むなどの条件付きで補助金を充実させれば、そのような家族の背中を押せるのではないか。

さらに、空き家をビジネス利用したいと考えている人達への補助金の制度を確立することも必要だろう。先程、空き家の旅館的活用を提案したが、自治体で行うとなると改装費用などが負担になる。そこで、ビジネス利用したいと考えている人達への補助金の充実をはかれば、自治体の負担を減らして、旅館や民宿としての空き家の活用ができる。

空き家の旅館的活用は、地域資源を有効活用し、観光振興や地域経済の活性化に貢献する有力な手段だ。しかし、その実現には多くの課題が伴う。補助金制度の充実とともに、適切な運営支援や地域社会の協力などが、空き家問題の解決と地域振興へと繋がっていく。

ＵＩターンを促進させるためには、まず南陽市の魅力を知ってもらい、移住しやすい環境を整えることが大切だ。そのために、空き家の活用と補助金の充実をすすめていくべきだ。

私自身、南陽市に引っ越してきて、この地域の様々な魅力を発見し、住み続けたいと感じている。持続可能な地域とするために、まだ発見出来ていない魅力をたくさん見つけ、いつかはそれを発信できる立場になっていきたいと思っている。

山形県の定住率を上げるために

米沢中央高等学校　二年
小島未裕

近年、山形県では、人口減少が顕著であり、将来も減少するという推計が示されている。その大きな原因として、「若年層の転出」が挙げられる。若年層転出の大半の理由は、進学・就職による県外流出である。

私が所属しているクラスでは、県内への進学・就職希望者が三十七名中、五名程度であった。「県内高校卒業者の県外への進学・就職の状況」でも卒業者の約五十七パーセントが県外へ転出している。

県内の人口減少に歯止めをかけるべく対策として次のことを提案し、「県内の定住率」を高めたいと考える。そこで、重点を置くのは、「情報発信」である。

第一に、「就職先の確保」である。そのためには、県出身の新規卒業生及び各大学のUターンを検討している卒業生に対し、山形県内の企業の自己PRを強化していくべきだと考える。なぜならば、私達県内在住の高校生でも、地元企業の実態をほとんど知らないのが実状であるからだ。そこで各企業の強みや特徴、資格取得等のサポートなど、きめ細かな情報を発信していくべきだと考える。

第二に、「居住先の確保」である。そのためには、公営集合住宅への優先的入居または賃料の一部補助など、経済的サポートを行うべきである。新たな土地で生活する人や、戻ってきた人など、転入してくるにもコストがかかるため、経済的サポートを行い、コミュニティー作り等の日常生活の不安をまず解消できるようなスタイルを取り、山形県へ安心して住んでいけるようになってほしいと考えた。

第三に、「生活の彩り」である。山形県の自然や食の魅力をより一層PRするべきだ。例えば、山・川・海など、自然を満喫できるアウトドアスタイル。肉や野菜、果物など食の充実をPRすることだ。山形県に住むにあたり、生活がより一層楽しくなる娯楽が必要だと考えた。そこで、山形県のHPでも紹介されてい

る「食と自然」が活かされたコテージなどをアピールし、山形県の定住への後押しになるようにと考える。

以上、三つのことをＰＲし、山形県の定住率を高めたいと考える。また、情報を発信するにあたって、スマホやインターネットを活用する人が圧倒的な現代において、アクセス者と同世代の人が制作した動画等を発信することにより、閲覧数を増やしていけると考える。

山形県に住む人が安心して、楽しく過ごせる街づくりを行い、もっと好きになる人が増えたらと思う。

審査講評

第七回の小論文コンテストには、四校九十七名の応募がありました。今回も、高校生のみずみずしい感性や読み応えのある小論文がたくさん寄せられたことを感謝しております。

回を重ねてきたためか、論点把握が適切になり、①少子高齢化の進行②若者の県外流出③ＵＩターン促進の必要性④地域の魅力発信や誘致策の提案が共通の理解になってきたように思います。自分の経験や地域への強い思いも表現され、解決に取り組む姿勢が見られました。反面、具体的な提案内容や論理展開に類似のものが多くありました。また、観察や対応策の提案に深みが感じられないものや観察の記述を省略したものも見受けられます。対応策や改善についての記述内容が、既に実行されている事例の紹介に留まるのか、本人の提案内容なのかが判然としないものもありました。もう一段の工夫をお願いしたいところです。

応募者の問題意識の深さや取り組みの姿勢の違いから、現状把握や提案内容に、大きな差異が出てきています。既に具体的な対応策に取り組んでいるものもいれば、ようやく問題の所在を知ったものもいます。しかし、知らなかった問題に気が付き、継続して取り組んでくれればコンテストの目的の一つは達成されたといえます。

残念に思えたのは、せっかく良い提案をしながら、その提案が自分とどう関わるのか説明が十分でないものも見受けられたことです。テーマに「地域の未来と私の生き方を考える」とあるように、自分の生き方として課題解決に取り組み、社会の未来と私の生き方をとおして持続可能な地域のあり方を主体的に展開していってほしいと思いました。

今回応募してくださった高校は四高校で、応募校数が減少したことはとても残念です。多くの高校からの応募を願いますが、添付の資料から県内定住やＵターンを期待するこちらの意図が見え、県外への進学や就職を考えている生徒諸君には、応募しにくい課題だったかもしれません。しかし、県外、国外に目を向けた自分の志に取り組み、郷里を離れていてもその今後の姿を考え、対応策や生き方を提案していくことはできるのではないかと思います。多くの方のご応募をお待ちします。

置賜地区高校生「地域と私たちの未来を考える」第七回小論文コンテスト

応　募　要　項

一．趣　　旨

近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も人口が減少し、将来も減少する推計が示されています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、地域全体の衰退に結びつくものと懸念されています。人口減少の様々な要因の一つに、若年層（十五～二十四歳）が進学・就職で県外に出て、戻ってくる人が少ない「若年層流出」があげられています。このような現状を踏まえて、地域と私たちの未来をどのようにつくり上げていくべきなのでしょうか。高校二年生の皆さんにとって、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路に進むにしても大事なことです。当コンテストは皆さんが地域と自分の未来を考える契機になることを願い、実施するものです。

二．テ　ー　マ

人口減少社会の中でも持続可能な地域とするため、地域の未来と私の生き方を考える

三．対　象　者

置賜地区高等学校二年生

四．応募規程

①応募要項の資料編や独自の資料を参考にして、テーマについて考えをまとめてください。また、各自の題名を付けてください。

②文字数は一二〇〇字以内（四〇〇字詰め原稿用紙三枚以内）、一〇〇〇字以上を目安とします。

③原稿用紙は縦書きに、一行目に題名、二行目に学校名・氏名、三行目から本文を書いてください。題名、学校名・氏名も字数に数え、不記載は減点にします。

④使用鉛筆はＢ又は２Ｂを用い、字は大きく鮮明に書いてください。

五. 審査の観点

①観察力　現状を注意深く見て学習し気づきを得ているか。
②提案力　独創性に富み前向きな提案であるか。
③主体性　自分が課題解決にどのように具体的に関わっていくか。
④論理性　客観的、合理的な論理展開ができているか。
⑤表現力　字は大きく鮮明（読みにくいものは減点）に書き、誤字脱字がなく、言いたいことを十分に伝えている文章と題名であるか。

この五つの観点を踏まえた小論文を書いてください。この観点で評価します。

六. 応募先　各学校の担当者まで
七. 応募締切　各学校で指定する期日まで
八. 表彰　各学校から米沢有為会米沢支部事務局への提出締切日　九月三日（火）［必着］
九. 表彰式　最優秀賞一点　優秀賞四点　入選五点
十. 審査委員長　十月二十六日（土）　米沢市内ホテルにて
十一. 主催・共催　米沢有為会会長　平山英三
十二. 後援・協賛　公益社団法人米沢有為会　学園都市推進協議会
置賜総合開発協議会　置賜地区高等学校校長会　米沢商工会議所　長井商工会議所
米沢信用金庫　ＮＣＶ株式会社ニューメディア

（注）この応募要項・資料編や今までの優秀小論文並びにこのたび新たに作成した第七回小論文コンテストガイダンスを、右のＱＲコードからご覧になれます。

資　　料　　編

■ はじめに、山形県及び置賜地区の人口の動きを、将来推計人口（資料1）、県外転入・転出状況（資料2）、山形県高校卒業者の県外への進学就職状況（資料3）のデータから見てみましょう。

資料1　山形県及び置賜地区市町別の将来推計人口

	2020 年	2030 年	2040 年	2050 年	人口変化率 2050／2020
山形県	1,068,027	945,122	827,776	710,838	66.6%
米沢市	81,252	71,907	62,506	53,112	65.4%
長井市	26,543	23,140	20,005	16,881	63.6%
南陽市	30,420	26,419	22,851	19,390	63.7%
高畠町	22,463	19,257	16,549	13,826	61.6%
川西町	14,558	11,636	9,253	7,107	48.8%
小国町	7,107	5,591	4,345	3,298	46.4%
白鷹町	12,890	10,489	8,490	6,660	51.7%
飯豊町	6,613	5,435	4,422	3,508	53.0%
置　賜	201,846	173,874	148,421	123,782	61.3%

出典：国立社会保障・人口問題研究所

置賜地区では、2050年の人口が2020年と比較して39％減少すると推計されています。

資料2　山形県（置賜）の県外転入・転出状況（令和４年１０月～令和５年９月）

		県外転入 a	県外転出 b	転出超過 b-a
山形県全体		14,862	18,023	3,161
	若年層	4,297	6,804	2,507
置賜全体		2,690	3,417	727
	若年層	835	1,361	526

出典：令和５年山形県の人口と世帯数

令和4年10月～5年9月の山形県（置賜）の県外転入・転出状況は、3,161（727）人の転出超過です。

また、山形県（置賜）の若年層（15～24歳）の転出超過は2,507（526）人となっており、高校や大学等の卒業や就職を迎える若者層の転出超過が多く、県人口減少の大きな要因の一つになっています。

資料3　山形県の高校卒業者の県外への進学・就職状況

	卒業者数	大学等進学者数(うち県外)	専修学校等進学者数(うち県外)	就職者数(うち県外)	計(うち県外)	県外の割合
令和４年度	8,998	4,450 (3,251)	2,137 (1,212)	2,272 (449)	8,859 (4,912)	55.4%
令和５年度	8,767	4,282 (3,160)	2,124 (1,238)	2,158 (442)	8,564 (4,840)	56.5%

出典：令和５年度学校基本調査卒業後の状況調査山形県結果

令和5年度の高校卒業者のうち、およそ57％が進学や就職で県外に出ていきます。

■　置賜地域とはどのような地域でしょうか。それに関連する資料として、置賜総合支庁作成の『令和5年度置賜地域の概況（令和5年7月）』があります。

資料　r5okitamagaikyo0.pdf (pref.yamagata.jp)

また、山形（県）には、ゆとりのある暮らしと充実した子育て環境があります。「山形県の暮らし」から見てみましょう。例えば、次のようなことです。

資料　https://yamagata-iju.jp/pref/number.pdf

仕事		高い正規雇用率と共稼ぎ率（全国２位）、短い通勤時間（東京の半分以下）、仕事からの帰宅時間が早い、有給休暇取得率が高い、育児中の女性の就業率が高い
子育て・教育		待機児童数「ゼロ」、安い教育費（東京の半分以下）、一人ひとりに丁寧に向き合え、地域の魅力や伝統に触れられる教育環境
暮らし	住まい	安い住宅購入費用（東京の 60%）、高い持ち家比率（75%）
	安心・安全	低い犯罪率（全国６位）と高い検挙率（全国１位）
	お金	東京と比べ、収入差は約７万円/月であるのに対し黒字額の差は約２万円/月

次に、国（厚生労働省）は人口減少社会についてどのように考えているかについて、『平成27年度厚生労働白書』から見ることができます。その概要版の資料を下記からご覧になれます。この資料は難しいかもしれませんが、挑戦してみてください。

資料　https://www.mhlw.go.jp/content/000351674.pdf

■　人口減少の一因である「若年層流出」等の状況を統計データで見てきましたが、これに歯止めをかける様々な対策が講じられています。それらの取組を紹介しましょう。

資料4　置賜圏域の将来像・・行政施策「置賜定住自立圏共生ビジョン」の取組例

人口減少や高齢化は急速に進んでおり、今後も、こうした傾向は続くものと予測されます。急激な人口減少は、労働力人口の減少による地域経済の縮小、担い手不足による地域活力や地域機能の低下、社会基盤の維持管理コストや社会保障費の増加等による自治体財政の悪化などを招き、さらなる人口減少を引き起こしてしまうといった悪循環に陥る危険性をはらんでいます。こうした状況の中、今後も、地域の活性化を図り持続的に発展していくためには、単独自治体での事業展開には限界があることから、広域で連携し、効果的、効率的に行政運営を行うことが必要です。また、自治体間の連携に加え、圏域内の関係団体、事業者、住民等との協働を推進することで、さらなる相乗効果が期待されます。このような認識の下、置賜圏域の８市町は、それぞれの独自性を維持しながら、地域の魅力をしっかりと磨き、その上で様々な分野において連携を深めつつ、住民の暮らしに必要な諸機能を圏域全体として確保することで、住民が暮らしやすい、活力ある圏域を創造し、共存共栄を目指します。置賜圏域のかけがえのない財産を次世代に引き継ぎ、圏域全体が未来に向けてさらに発展するよう、医療や福祉、子育て・教育の充実を図り、置賜の持続的発展を支えるとともに、中心市である米沢市の特色である学園都市の強みを生かして大学等と連携し、地域経済を活性化させ、人々の交流で賑わう社会基盤を形成することで、魅力あふれる圏域を目指し前進していきます。

出典：置賜定住自立圏第２次共生ビジョン（令和６年３月策定）「圏域の将来像」から

資料5　若者定着・若者回帰に向けた県内の諸取組の紹介

［事例１］　山形県と大学等とのUIターン就職促進協定　２９大学等と協定を結ぶ

山形県では、山形県内の企業情報等の提供、大学内での就職ガイダンスの開催等について、大学等と連携して取り組むことにより、Uターン・Iターン就職の一層の促進をはかり、県内企業の人材を確保することを目的として実施している。

＜協定締結大学　令和５年11月19日現在＞　東海大学、神奈川大学、専修大学、大東文化大学、日本大学、明治大学、国士舘大学、駒澤大学、東洋大学、文教大学、立教大学、帝京大学、帝京大学短期大学、明治学院大学、立正大学、拓殖大学、立命館大学、法政大学、千葉商科大学、神奈川工科大学、関東学院大学、東京工科大学、日本工学院専門学校、日本工学院八王子専門学校、日本工学院北海道専門学校、東北学院大学、東北工業大学、東北福祉大学、東京農業大学

出典：山形県雇用・産業人材育成課

［事例２］　やまがた就職促進奨学金返還支援事業の実施

大学等に在学中の方を対象として、県と市町村が連携して奨学金の返還の一部を支援する事業。米沢有為会、長井教育会、飯豊町も市町村枠で実施。平成27年度から始まり今年度も継続。要件や手続き等については、山形県の「やまがた就職促進奨学金返還支援事業」をご覧ください。

出典：山形県産業創造振興課

［事例３］　高校生就職希望者や就職者に対する地元への人材確保・定着の諸取組

置賜地区雇用対策協議会（行政機関［米沢市・南陽市・高畠町・川西町］や米沢商工会議所、ハローワーク等が連携し、若者の雇用安定を目指す団体）が、模擬面接会（高校３年生対象）や企業説明会（高校２年生の就職希望者に向けて企業動画を制作）、新規学卒者ビジネスマナー講習会や新入社員フォローアップセミナーなどの諸事業を実施している。求人・求職者の両面からサポートし、雇用の確保と定着、就職支援に取り組んでいる。

また、西置賜地区雇用対策協議会では、企業と繋がる就職サーチアプリから企業の最新募集情報が閲覧できるようになっている。

［事例４］　各高等学校における多様な取組

各高等学校においては課題研究や探究学習における地域学習の展開や、職場見学・体験、インターンシップの実施などを通して、郷土愛を育むとともに、社会的自立に向けた勤労観・職業観の育成を目指した多様な特色ある取組が行われている。

［事例５］　働く人の様子・思いなどをSNSで発信

米沢商工会議所が、若手社員や経営者などへのインタビューにより地域で働く魅力を発信する「よねざわのわわわ」［URL：米沢商工会議所（jinzaikakuho-yamagata.info）］プロジェクトを企画・実施。高卒就職者や県外大学へ進学後のUターン、他地域からのIターン事例など幅広い情報をインスタグラムや動画などで発信している。

＜米沢有為会からの一年早めの情報＞・・**奨学金と学生寮の募集案内**

米沢有為会では、皆さんが再来年大学等へ進学した後の学生生活を応援するために

①３つのタイプの奨学金（貸与型：女子向け住居費補助奨学金２万円と一般貸費奨学金４万円、減免型：地元若者定着奨学金４万円条件を満たせば２万円減免　いずれも無利子）と

②東京と仙台に男子学生寮（平日朝夕２食付き、個室、月6.5万円程度）を用意しています。

今から情報をゲットしてみてください。

詳細は米沢有為会HPで（QRコードからどうぞ！）

二〇二四年度置賜地区高校生
「地域と私たちの未来を考える」
第七回小論文コンテスト

優秀小論文集

発行日　二〇二四年十月二十五日
発行者　公益社団法人米沢有為会
会　長　平　山　英　三
〒一八二-〇〇〇四　東京都調布市入間町一-三六
東京興譲館内
電話・ＦＡＸ　〇三-三三〇九-三三〇二
ホームページ http://www.yonezawa-yuuikai.org/